



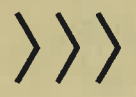
# 詩人 川崎洋展

KAWASAKI HIROSHI

言葉に愛想をつかしながら、  
やはり詩を書く。

川崎洋肖像(八女市蔵)

9 / sat  
17  
2022



1 / sun  
22  
2023

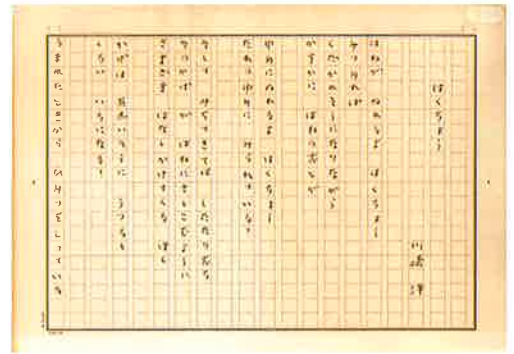
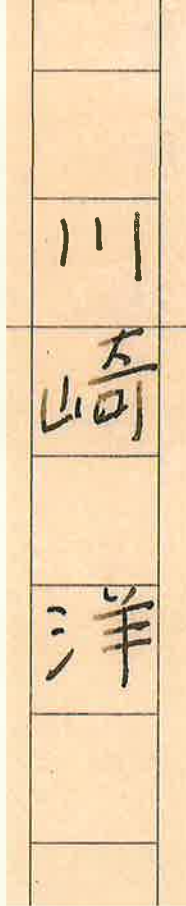
八女市田崎廣助美術館特設コーナー

開館時間 9時-17時(入館は16時30分まで)  
入館料 無料  
休館日 月曜(祝日の場合は翌日)  
主催 八女市・八女市教育委員会

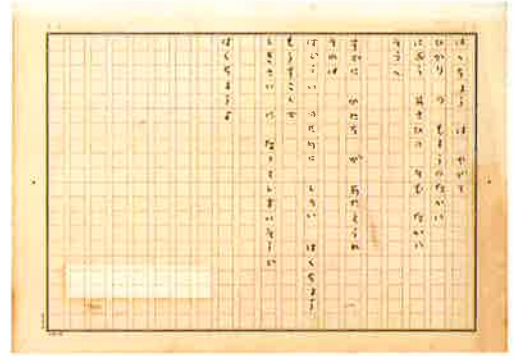
八女市田崎廣助美術館  
福岡県八女市立花町原島108-1  
TEL 0943・24・8304  
FAX 0943・24・8305



八女の二字を見ると、  
いつも、熟れた穂がどこまでも続く  
麦畑が、わたしの中に広がる。  
金色の海だ。  
風に揺れる音は波の響きに似て  
想い出の中になだれ込んでくる。



①



②

川崎洋が東京から八女市へ一家で疎開したのは昭和19年。九州の言葉が分からず苦心しながらも、東京弁も地方の言葉であると気づいたので。多感な青少年期を筑後地方で過ごし、詩の世界へ導いた丸山豊との出会いは、詩人川崎洋の原点といえるでしょう。帰京して間もなく発表した「はくちょう」は、詩全体がひらがな書きであり、川崎の代表作です。本展では、本作と併せて、「花」「鳥が」の直筆原稿を紹介いたします。ときにどうしようもなく暗くなる心を、ずっと軽くさせてくれる川崎の優しい語り口。素朴で豊かな世界を描かせたら右に出る者はいないといわれる、川崎洋の世界観をご堪能ください。

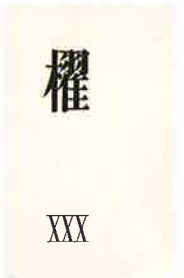
川崎 洋  
かわさき ひろし



1930年東京に生まれる。1944年八女郡岡山村（現八女市）に疎開し、旧制八女中に転入。同級生の水尾比呂志、松永伍一らと交流を重ねた。同じ頃、丸山豊の見識に触れ、詩誌『母音』に参加。西南学院専門学校英文科在学中に父が急死し、中退。一家の生活を支えるため、単身上京し米軍横須賀基地に勤めた。1953年茨木のり子と詩の同人誌『櫛』を創刊。後に同人に谷川俊太郎や大岡信らも加わる。1955年第1詩集『はくちょう』を刊行。詩人、放送作家、童話など多方面で活躍。筑後地方など各地の方言採集にも取り組み、著作も多い。主な受賞歴に芸術選奨文部大臣賞、無限賞、高見順賞、藤村記念歷程賞など多数。2004年逝去。享年74歳。



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧

9/sat 17 2022 >>> 1/sun 22 2023

開館時間 9時-17時 (入館は16時30分まで)  
入館料 無料  
休館日 月曜 (祝日の場合は翌日)  
主催 八女市・八女市教育委員会

Yame  
Tasaki Hirotsuke  
Museum of Art  
ESTABLISHED  
2016

八女市田崎廣助美術館

福岡県八女市立花町原島108-1  
Tel. 0943・24・8304

- ①『はくちょう』直筆原稿 (八女市蔵)
- ②深大寺にて1975年 (左より川崎洋・水尾比呂志・松永伍一)
- ③『櫛』第30号 1994年12月20日
- ④『はくちょう』第30号 1994年12月20日
- ⑤『はくちょうをかぶったオニの子』1979年 あかね書房
- ⑥『詩集 食物小屋』1980年 思潮社
- ⑦『ビスケットの空カン』1986年 花神社
- ⑧『はほえみにはほほえみ』1998年 童話屋